

## 図書館来館者数の増加を目的とした ポイントカードの導入

依光 朋子、山崎 裕司、萩野 智美  
高知リハビリテーション学院

【はじめに】全国大学生生活共同組合連合会「学生の消費生活に関する実態調査」によれば 1985 年から 2008 年にかけて大学生の読書時間は 50 分から 29 分に短縮し、読書時間ゼロの大学生が約 4 割にのぼっている。理学療法士、作業療法士、言語聴覚士の養成校である本学院でも、図書館の貸出利用者数は平成 20 年度 7731 人、21 年度 7717 人、22 年度 7347 人と年々減少している。そこで今回、行動分析的観点から図書館利用者数を増加させる目的で介入を行ったので、その効果について報告する。

【方法】対象は平成 22 年度本学院在学学生 520 名、平成 23 年度本学院在学学生 523 名である。

平成 23 年 10 月から、利用者にポイントカードを配布し、以下のようなルールでポイントを付与した。図書の貸出機会、返却機会、国家試験一問一答問題への挑戦、それぞれについて 2 ポイント、文献相互貸借申込 6 ポイントである。そして、合計 10 ポイントで、借用可能な図書数を 1 冊増加、あるいは漫画本 3 冊の貸出。さらに 30 ポイントで、漫画本 10 冊の貸出という特典を準備した（漫画本の蔵書数は 713 冊、そのほとんどは貸し出しされていない）。そして、23 年 10 月から平成 24 年 2 月までの期間における来館者数、貸出図書冊数を平成 22 年度の同時期と比較した。開館日数は、平成 22 年度 96 日、23 年度 97 日であった。

【結果】平成 22 年度の利用人数は、10 月 148 人/day、11 月 178 人/day、12 月 159 人/day、1 月 148 人/day、2 月 158 人/day であった。平成 23 年度は、10 月 148 人/day、11 月 209 人/day、12 月 187 人/day、1 月 175 人/day、2 月 199 人/day であった。平成 22 年度と 23 年度を比較すると、11 月 13.1%、12 月 11.4%、1 月 11.8%、2 月 39.5%の有意な増加を認めた。

平成 22 年度の貸出冊数は、10 月 1261 冊、11 月 1845 冊、12 月 1320 冊、1 月 1199 冊、2 月 1247 冊であった。平成 23 年度は、10 月 1240 冊、11 月 1909 冊、12 月 1282 冊、1 月 1174 冊、2 月 1360 冊であった。貸出冊数には、有意な変化を認めなかった。

【考察】行動した結果、環境からよい応答があるとその行動の生起頻度は増加する。逆に、悪い応答があるとその行動の生起頻度は減少する。行動が増加する場合の環境からの応答を強化刺激、減少する場合の応答を嫌悪刺激と呼ぶ。これは行動分析学における行動の法則である。適切な行動を増加、定着させるときには、その行動に対する強化刺激を増加させるように働きかける。今回用いた借用可能な図書数が 1 冊増加するという特典は、多くの図書を利用したい学生にとって強化刺激となったはずである。また、貸し出しを行っていない漫画本の借用は、漫画好きであれば通常図書館を利用していない学生にとっても強化刺激となった可能性が高い。したがって、これらの強化刺激が有効に機能した結果、図書館への来館者数が増加したものと考えられた。

一方、貸出冊数には有意な変化は見られなかった。今回のポイントは、借用機会に対して与えられていたため、同時に 5 冊を借用した場合も、1 冊を借用した場合もポイントが同じであった。つまり、借用冊数の増加に対して強化刺激が十分に機能しなかった可能性がある。今後はこの点について改良を加えた再介入が必要である。